

日本バプテスト連盟宣教部 教会音楽室  
賛美歌検討委員会『新生賛美歌』曲評価 中間報告Ⅱ

2022. 5. 17

目次（項目）

序、『新生賛美歌』曲評価 中間報告Ⅱ（101番～200番）

1. 賛美歌検討委員会議の歩み
2. 評価活動について
3. 今回の評価項目だてについて

I 伝統的（標準的）賛美歌

- A. ドイツの賛美歌
- B. 英国の賛美歌
- C. 詩編歌
- D. 伝統（標準的）賛美歌の訳詞の課題

II. 福音唱歌

III. バプテスト

- A. 海外のバプテストの賛美歌
- B. 日本のバプテストの牧師による賛美歌
- C. 日本バプテスト連盟オリジナル創作賛美歌

IV ことばの課題

- A. 文体一文語調、口語調
- B. 天皇制用語、神道用語とされることば
- C. 課題とされることば

V 子ども

VI クリスマスの賛美歌

- A. 訳詞
- B. オリジナル賛美歌
- C. 各国の賛美歌
- D. 歌詞の課題から

まとめとして

『新生讃美歌』曲評価 中間報告Ⅱ（101番から200番）

教会音楽室長 江原美歌子

賛美歌検討委員会議では、2008年発足より『新生讃美歌』（2003）の曲ごとの評価を開始し、これまでに219曲までの作業にあたってきた。この働きは「新生讃美歌フォーラム」（2005）において、将来の『新生讃美歌』（2003）改訂を見据える中で「賛美歌研究を今から始めること」の提言が契機となっている。この曲ごとの評価に加えて、賛美歌検討委員会議の主な取り組みとしては、曲評価から与えられた課題を取り上げた研修会（天皇制用語、賛美歌編纂について）の開催、特別委員会対象「新生讃美歌アンケート」の実施と課題共有、『新生讃美歌』の参考資料として『新生讃美歌ブックレット』の発行など、多岐にわたる研究・活動を行ってきた。

「中間報告Ⅱ」は、「中間報告」（1番～100番）に続く第2弾として発行するもので、101番から200番を対象とした評価報告書である。評価は『新生讃美歌』の目次の順で行っており、I「礼拝 父なる神 憐み」～II「神の働き イエス・キリスト 降誕」までとなる。100曲と区切ったことで項目をまたぐことになったが、今回の100曲からも、多くの気づきが与えられた。評価プロセスは、委員による曲ごとの事前研究、発表、意見交換、評価の順で、1）詞、2）曲、3）目次の3つのポイントに分け、それぞれ4段階で評価を行った。評価作業の目的は、『新生讃美歌』で採用された賛美歌を通して「バプテストのものさしとは何か？」を求めることにある。賛美歌検討委員は「一バプテスト」、「一信徒」として、教会で養われてきた聖書理解や信仰生活、さまざまな礼拝と賛美経験から語り合い、私たちの賛美歌の「ものさしとは何か」の検証に努めている。これらの気づきが今報告書を通して広く分かち合わせ、諸教会・伝道所の礼拝と賛美に資する学びとなることを願っている。

「中間報告Ⅱ」では、評価議事録から課題を整理し、以下の項目で、具体的な曲をあげつつ、そこでの課題をまとめ報告しており、項目は、伝統的（標準的）賛美歌、福音唱歌、バプテストの賛美歌、ことばの課題、子どもの賛美歌、クリスマスの賛美歌である。今報告では、賛美歌検討委員の坂本献委員、内藤幹子委員、藤井秀一委員に加えて、協力委員である武章子委員、麦野達一委員に協力をいただいた。報告書作成プロセスにおいてもあらたな発見があり、補足した部分があることを付記しておきたい。

## I 伝統的(標準的)賛美歌

『新生讃美歌』は、必ずしもバプテストの作者による賛美歌のみが採用されているわけではなく、キリスト者の礼拝と宣教と伝道の歩みの中で生まれた賛美歌で、各教派、教会の群れによって歌い継がれたものが淘汰され、あらたな曲も加わり歌集に収録されたものである。多岐に亘る賛美歌に触れる度に、教派を超えた教会音楽の営みから編纂されたものであることを再認識させられる。「伝統的(標準的)賛美歌」とは、プロテスタントの歩みの中で共有されてきた賛美歌の「代表的」なものを指しており、これらの賛美歌は多数の教派によって採用されている。賛美歌集編纂の歩みが、キリスト教派の隔てを超えた賛美歌の「特有」の文化・歴史であることを確認するものである。

### A. ドイツの賛美歌（解説順）

- 114 番「わが霊よ 主をほめよ」
- 120 番「主をたたえよ カみつる主を」
- 118 番「立ちてあおげ」
- 128 番「われらの神 くすしき主よ」
- 144 番「今こそ主よわれ安らかに」
- 182 番「天より降りて」
- 142 番「いとも麗しや」
- 194 番「まぶねの傍に」

114 番「わが霊よ 主をほめよ」作詞者のヘルンシュミット (Johann D. Herrnschmidt, 1675-1723) は当代のドイツ敬虔主義を代表する優れた賛美歌作者と評価されている人物である。敬虔主義的モチーフの賛美歌には「わが霊」など個人の内面性をあらわす言葉が用いられる傾向があり、本作も同様の傾向を示す。一方で『新生讃美歌』では採用されなかった節では、社会的に弱い立場に置かれる者（参照：『讃美歌 21』169 番 4-5 節「虐げられ悩む者」「飢え渴く子ら」「捕われし民」「寄留の民」「嘆く子」「くずおれし母」）と共に歩む神を賛美している事にも言及しておきたい。

120 番「主をたたえよ カみつる主を」作詞者のネアンダー (Joachim Neander, 1650-1680) もドイツ敬虔主義の系譜に連なる人物であり、本作にも「わが心」「内なるもの」のようにその特徴を示す言葉が用いられている。128 番「われらの神 くすしき主よ」もネアンダーの作詞であるが、こちらは主語が「我ら」であり、共同性や賛美への「招き」のニュアンスを強く打ち出している。

118 番「立ちてあおげ」作詞者のモンゴメリー (James Montgomery, 1771-1854) はモラヴィア兄弟団の系譜に連なる人物である。古い詩編歌に後にこの歌詞が組み合わされた。原詞には作詞者の「神の選びと召しへの応答」のニュアンスがより強く表れている。キリストの身体としての新たな共同体を形作っていきたいという情熱を、2 節「生ける焰」という言葉に感じることができる。

144 番「今こそ主よわれ安らかに」は詞・曲ともにルター (Martin Luther, 1483-1546) の作によ

る。このように古くから教会で歌い継がれてきた賛美歌が新たに訳され、『新生讃美歌』に収録されていることは実に感謝である。神殿にささげられる幼子イエスに出会った老シメオンの賛歌であり、歌いやすい旋律ではないので、礼拝で「会衆賛美」として用いる機会は少ないであろう。葬儀の「前奏曲」として用いるのに相応しい一曲である。

182番「天より降りて」もルターの作による。ルターが子どもたちの「まぶね遊び」のために作った賛美歌であり、「天使」からのメッセージを受け「子どもたち」が応答するという構成になっている。ただ、歌詞の限られた文字数の中で「主語」「役割」を訳出するのは大変困難であるため、礼拝や集会での用い方が難しい面もある。何らかの解説が付記され、用い方のヒントが示されるとより良いと思われる。

142番「いとも麗しや」は詞・曲ともにニコライ (Philipp Nicolai, 1556-1608) の作であるが、後にバッハ (J. S. Bach, 1685-1750) が様々な形で編曲をした賛美歌として有名である。「公現」の賛美歌として知られるが、「受胎告知」「再臨」の賛美歌として位置付けられているケースもあり、興味深い。

194番「まぶねの傍に」はゲルハルト (Paul Gerhardt, 1607-1676) の詞に、バッハが100年以上後に曲を付けた。ドイツ30年戦争 (1618-1648) やペストの大流行 (1636-1637) による苦しみがゲルハルトの創作に影響を与えていると考えられているが、本作も例外ではないという印象を受ける。2節「死の深き闇」は「輝き」「光」をいよいよ際立たせ、クリスマスの喜びが強く表されている。「情景」から「歌う者の信仰告白」へと導かれていくユニークな構成である。賛美歌集によって様々な譜面を採用しているので、用途によって柔軟に選択することができる。

## B. 英国の賛美歌

106番「主はわが牧主」アイザック・ウォッツ (英国国教会)

121番「み神の力をほめたたえよ (A)」アイザック・ウォッツ (英国国教会)

143番「世に告げよ」チャールズ・ウェスレー (メソジスト)

167番「天にはさかえ」チャールズ・ウェスレー (メソジスト)

145番「輝く朝」オクスフォード運動 (英国国教会)

106番「主はわが牧主」：英国国教会で詩編歌歌唱が主流であった時代に、創作賛美歌を賛美に導入したことで知られているアイザック・ウォッツ (Isaac Watts, 1674-1748) による詩編のパラフレーズである。パラフレーズは、みことばに基づき自分の言葉で作詞したもので、この曲はみことばを韻文化した「詩編歌」とは見なされていない。121番「み神の力をほめたたえよ (A)」もウォッツにより創世記1章を基に作詞されており、これらの創作賛美歌の試みは当時画期的なものであった。

143番「世に告げよ」は、信仰復興運動の担い手であるチャールズ・ウェスレー (Charles Wesley,

1707-88) による作詞で、宣教を伝える使命が表現されている。167番「天にはさかえ」は、『讃美歌21』においては「聞け、天使の歌」と「聞け」という言葉で始まっており、ウェスレーが宣教の柱としていた「すべての人々に福音が開かれている」というメッセージが初行に相応しく訳されている。信仰復興運動が、18世紀の英国バプテストの諸教会に大きな影響を及ぼしたこと、その後の19世紀のキャンプ・ミーティング・ソングや福音唱歌を歌う群れの賛美の基礎を築いたことは特筆しておきたい。

145番「輝く朝」は、英国で起った礼拝刷新「オクスフォード運動」の中で、エドワード・キャスウェルによってドイツ語のカトリック賛美歌から英訳され、礼拝歌として広く歌われるようになった曲である。『新生讃美歌』（2003）の柱である「礼拝の賛美歌」として加えられた1曲で、輝く「朝」と歌うので、朝の賛美との印象があるが、「夜のとぼり」「夕べの鐘」とあり、どの時においても「イエスが讃えられよ」と賛美する歌となっている。

### C. 詩編歌

117番「新しき歌もて」

ジャン・カルヴァン（Jean Calvin, 1509-64）により編纂がはじまった『ジュネーブ詩編歌』に収められている曲で、詩編98篇の韻文詞である。『讃美歌』（1954）では12番（詩編118篇）で親しまれた曲ではあるが、『新生讃美歌』（2003）では日本キリスト改革派教会大会讃美歌検討委員会の訳詞を転載した。「詩編歌」はバプテスト教会の礼拝で積極的に歌われてこなかった印象があるのは伝道集会等では馴染まない曲調であったためだろうか。プロテスタントの草創期に、カルヴァンらが賛美のことばとして重きをおいた「詩編歌」は、みことばを歌う重要性からも歌い継いでいきたい賛美歌である。評価の中では、拍子がないことでの歌いにくさ、「アーメン」は原曲にはないなど、「詩編歌」の特徴を踏まえての指摘があげられた。

### D. 伝統(標準的)賛美歌の訳詞の課題

上記の伝統賛美歌における訳詞の課題は以下があげられる。伝統的に歌い継がれている訳詞ということもあり、表現が時代にあって見直されるべきものが散見される。

106番：「死も恐れじ」は「死ぬ覚悟がある」とも読めてしまうことは課題であり、「死の陰を歩む」すなわち「生きていくこと」が前提である。文語を口語にしていこうと試みるとよい。

143番：1節の「地の果てまで」は、「全地に」とするなど歌い替えの提案があった。

167番：「み座」「処女（おとめ）」「君を」等、訳し直しの検討が必要である。

## Ⅱ. 福音唱歌

19世紀、米国で生まれた福音唱歌は、恩寵による救いの教えを強調し、リバイバル集会や「キャンプ・ミーティング」を通して一般教会にも広まった。概して福音唱歌は、率直な言葉で神が我々に与える愛の証しを伝え、それが慣れ親しみやすい旋律によって支えられている。平易であるが、罪・救いの二

元論的考え方、キリスト信仰以外を受け入れられないような（他は罪、暗闇）宣教論は、今日では課題といえよう。

日本が開国され、最初に紹介された西洋音楽は福音唱歌であった。海外から多くの宣教師たちが伝道を始め、その時代と福音唱歌全盛の時代は重なる。米国で「当時、流行している賛美歌」である福音唱歌が持ち込まれた。そして、平易で歌いやすいいわゆる「賛美歌調」は日本での宣教に大きな役割を果たした。

（これは他の＜南部バプテスト連盟による＞アジア宣教でも同じであり、福音唱歌がその宣教に大きく用いられた。）

神学的深さには課題があるが、歌詞の平易さは訳詞にも利点があり、またキリスト教伝道に有効であった。加えて福音唱歌は日本での西洋音楽を定着させるのに大いに貢献し、「音楽」の教科書にも「いつくしみふかき」などの福音唱歌のメロディーが使われたことは興味深い。

また特に日本バプテスト連盟では戦後「新生運動」という福音派による合同大伝道集会在各地で持たれ、ここで使われた賛美歌は主に福音唱歌であり、今日も福音唱歌を愛唱する人が多いのはここにも理由があると思われる。またそこで培われたものは、バプテストのアイデンティティとして現行『新生讃美歌』にも脈々と息づいているといえよう。時に躍動的で時に情緒的であり、言葉が平易で内容がわかりやすい「福音唱歌」は特に日本での西洋音楽史においても多大な影響を与え、信仰の在り方にも影響を深く与えたのである。

101番～200番の内、以下の福音唱歌を取り上げる。

102番「罪にみてる世界」 詞：Julia H. Johnston,1910 曲：Daniel B. Towner “MOODY”

103番「望みも消えゆくまでに」詞：Johnson Oatman, Jr. 1897 曲：Edwin O. Excell,1897 “BLESSING”

104番「雨を降り注ぎ」 詞：Daniel W. Ehittle,1883 曲：James McGranahan,1883 “SHOWERS OF BLESSING”

105番「くしき主の光」 詞：Eliza E. Hewitt,1887 曲：John R. Sweney,1887 “SUNSHINE”

### 102番「罪にみてる世界」（『新生讃美歌Ⅱ』37番）

この曲は「ああ、めぐみ」という題で「聖歌」で親しまれてきたが、102番のオリジナル翻訳「罪にみてる世界」の悲観的にとらえられる部分は、キリストの光のないところはすべて暗闇、二元論的宣教を表すものであるが、後半の「ああ、めぐみ」は感謝と喜びへと私共を招くのである。

この時代の宣教論の理解では、教会を聖の領域とし、その関係は「神」-「教会」-「この世」の図式で表されるが、もともと原詞には「罪に満ちている世界」という表現はない。訳者の中田羽後の宣教理解が影響してか、原詞の神学や世界観が生かされていない翻訳は課題を感じる。一方で、この訳で慣れ親しんだ方々にとって、言葉を替えることには抵抗のある人たちも多いただろう。『聖歌』を使用していた人たちも馴染みの曲が入っているというのも、『新生讃美歌』の一つの良さではあるが、この曲に関しては訳し直した方がよい賛美歌の一つである。時代の変化や神学理解において新たな「恵み」発見がある中で、改訳することは、未来を拓くことになる。

### 103番「望みも消えゆくまでに」『リヴァイヴァル聖歌』（1949）

中田羽後訳。「主の恵みは数えられるものか」の課題では、わたしたちが恵みを数えているうちに、もっと大きな「単数形の恵み」に至るといふ側面もあるのではないか。個々の生活の中で神さまが与えてくださる励ましや慰めとしての「恵み」があり、そのような意味でここでは「恵み」という言葉が使われていて、「数えることのできる恵み」そのものを否定する必要はないのではないか。

また「天つ国の幸に酔う」は「酔って」はいけないと考える。どのように「現実における信仰の覚醒的な歌」にできるだろうか。福音唱歌は「罪と救い」「光と闇」の二元論が多く、現実の中での「迷い」等「あれかこれ」しかない中での信仰は苦難の中でどこまで耐え忍ぶことができようか。

#### 104番「雨を降り注ぎ」『基督教讃美歌』（1896）

中田羽後訳。「恵みのシャワー」であるのに、いわゆる「傘をさす雨」、「雨が降ること」それ自体が「恵み」のように捉えられてしまっている。そのため、日本の梅雨時から夏にかけて雨と関連して歌われる傾向があるかもしれない。気象の異なる海外諸国では、この歌詞をどのように受け止められているのだろうか。日本的な情緒に合わせて訳された印象を受けるが、原詞の意図するところからは少し外れているとの評価もあり、この曲も新たな翻訳が求められるのではないだろうか。

最初にアイラ・サンキーの歌集に収録された曲で、伝道集会等で多く用いられた曲である。Showers of blessing が全節の中で12回歌われていて、拍子も6/8（2拍子系）とリズムカルな曲調もあり、多くの信徒に愛唱されている賛美歌である。2節「眠る民の目を覚ましたまえや」の原詞 reviving again（再び燃えさせた）は、欧米でいう「信仰復興」の意で、訳を通して中田羽後の伝道の思いが込められているといえる。福音唱歌の賛美歌には「リヴァイヴァル」をテーマにした歌が多用されている。

参考：北部系バプテスト宣教師、ネーサン・ブラウン、A. ベンネット編纂の『基督教讃美歌』（1896）や、『リヴァイヴァル聖歌』に収録され、バプテスト教会では長く親しまれてきた。『讃美歌』（1954）には含まれていない。

#### 105番「くしき主の光」『讃美歌』（1903）308番

2節「くしき物の音」とは「賛美歌」のこと。歌うことはできないが賛美の音楽が心の中に満ちていて、それを神さまが聞いてくださっているという意味だが、非常に分かりにくく訳し直してもよいのではないか。『教会福音讃美歌』（366番）<sup>1</sup>では、「心に浮かぶのは 主への讃美」と訳しているが、「くしき物の音」のほうが、曲に言葉が乗る。原詩の「イエスのスマイル」は詩的な表現であるが、「み姿」と訳されたことにより、イエスの人間的な部分が隠されたとも考えられる。

3節など花鳥風月の歌詞であり、歌詞の神学的な深みという点では課題があるが、平易な言葉で分かりやすく、また音楽面では、音階や抑揚による乗りのあるメロディー、軽快なリズムも助けて、多くの信徒に愛唱され、教会の伝道集会・礼拝で歌われてきた曲である。福音唱歌には、大衆が分かりやすく歌い易いという長所があり、日本での伝道開始当初には、必要な賛美歌の要素として求められていた部分であろう。

---

<sup>1</sup> 『教会福音讃美歌』（いのちのことば社）は福音讃美歌協会讃美歌委員会により2012年に発行された。多くの慣れ親しんでいる福音唱歌を「分かりやすく心に届く讃美のことば」を求め改訳している。

### Ⅲ. バプテスト

#### A. 海外のバプテストの賛美歌

##### 136番「いとも確かな基かな」

詞はジョン・リポン（John Rippon, 1751-1836）の編纂した賛美歌集 “A Selection of Hymns from the Best Authors, Intended As an Appendix to Dr. Watts’ Psalms and Hymns（著名な作家による賛美歌曲集～アイザック・ウォッツの詩編と賛歌の補遺）”（1787）に収録されている。リポンはパティキュラー・バプテストの伝道活動に関心を寄せ、アンドリュー・フラーの影響を受け、福音的カルヴァン主義に立ち、重要な働きを担っていた人物である。136番はこの賛美歌集の中に収録されており、アイザック・ウォッツの『詩編と賛歌の歌集』の補遺という性格から、「みことば」を歌う賛美歌という特色が全面に表されている賛美歌集である。この賛美歌集はのちのバプテストの賛美歌集の参考とされ、英国バプテストの Ann Steele, Samuel Stennett, John Fawcett, Samuel Medley を紹介する歌集ともなった。『聖歌』（1958）、『新生讃美歌』（2003）で収録され他では見られないが、米国では大変親しまれている賛美歌であり、バプテストの賛美歌の遺産として継承していきたい賛美歌である。

##### 資料参考

『見えてくる バプテストの歴史』第3章「近世イングランドのバプテスト教会」P82、村椿真理、関東学院大学出版会、2011。

William J. Reynolds, Milburn Price, “A Survey of Christian Hymnody,” Hope Publishing Company, 1987.

#### B. 日本のバプテストの牧師による賛美歌

##### 107番「神の恵みはいと高し」

天野恒次郎（1866-1904）は、横浜バプテスト神学校（現在の関東学院）1894年卒業、96年根室教会、99年に小田原教会に赴任、その後長老派教会に移る。根室教会赴任時に、この賛美歌が書かれたことになる。ネーサン・ブラウンの歌集を継承し、アルバート・A・ベンネットが編纂した『基督教讃美歌』（1896）の70番に、「聖父神恩 神の洪恩」の項目で「かみのめぐみは ひさかたの」で収録されており、日本におけるバプテスト宣教初期の創作詞として憶えたい賛美歌である。この歌集は、日本における賛美歌集編纂の初期にあって、当時の礼拝で用いる標準的な賛美歌を参考に編集されており、また、バプテストならではの「バプテスマ」や「教会晩餐式」の歌などが収録されているのが特徴となっている。

##### 参考資料

『日本キリスト教歴史人名事典』P35、（教文館）2020。

『讃美歌略解 前編 歌詞の部』P267-268、（日本基督教団出版局）1954。

日本における「バプテスト」は、「英国国教会」に対峙して発生したわけではなく、「基督教のいろは」から伝えていく伝統の中で「見だし、与えられた」「バプテスト」であり、その点では初代バプテストとは異なることは理解しておくべきであろう。今日の日本における「バプテスト」においては、対峙すべきもの（「天皇制」「国家」他、様々な思想・宗教・宗教的なもの等）と対峙することにおいて、福音の内容を明確にしつつ実践する群れでありたい。

### C. 日本バプテスト連盟オリジナル創作讃美歌

目次—礼拝 父なる神 恵み

109 番「ひとものもときも」

目次—礼拝 聖書

129 番「神のことば」

131 番「イエスのみことばは」

132 番「主よ おことばをください」

138 番「主イエスは今日も」

139 番「イエスさまを信じましょう」子どもによる創作

140 番「空の鳥をみよと」

目次—神の働き イエス・キリスト 降誕

166 番「いと高きところには」

176 番「主は豊かであったのに」

179 番「暗き夜に」

180 番「イエスがここに」

195 番「待ちわびし日」

100 曲の中で、聖書と降誕の項目にオリジナル創作讃美歌が比較的多く収録されており、それは「聖書」に直接聞き、学びあう伝統のあるバプテストの特徴といえるのではないか。「降誕」が多いのは、バプテストに限らず、クリスマスは讃美歌が多く歌われ、音楽が溢れ、創作活動に開かれた時節であるからだろう。目次の「聖書」の項目では、信徒の作詞作曲による讃美歌が多く、クリスマスの「降誕」の讃美歌には、『新生讃美歌』（2003）で新たに採用した創作讃美歌が多く含まれている。

## IV ことばの課題

### A. 文体—文語調、口語調

具体的に、文体で課題と思われるものを以下挙げる。

105 番「くしき主の光」—「くしき物の音」とは「讃美歌」のこと。歌うことはできないけれど讃美の音楽が心に満ちていて、それを神様が聞いてくださっているとの意。

106 番「主はわが牧主」—「死も恐れじ」は詩編の表現の反映。しかし文語では「死ぬ覚悟がある」「死んでもかまわない」とも読めてしまい、誤解されるのではないか。今後、慣れ親しんだ讃美歌の歌詞の口語訳を試みてもよいのではないか。作詞の三輪源造（1871-1946）は同志社女子専門学校の教授となり、国文学の造詣が深く、当時の文壇の主流であった美文調の詞の特色がみられる。

108 番「主をほめたたえ」—「絶えせじ」は「とこしえにあれ」にしてはどうか。

135 番「愛するイエスよ」—「あれかし」は「ぜひともそうあってほしい」の意。

137 番「うみべの野で」149・150 番「来れやインマヌエル」—「縄目」は解説が必要。

- 151 番「わが心は あまつ神を」新共同訳聖書の言葉を用いて口語体への改作を試みてはどうか。
- 164 番「羊は眠れり」—「いなとよ」→「否とよ」は「いや、そうではない。違う。」の意。『聖歌』には脚注がある。「地には穏やか<sup>つち</sup>」文語調の聖書からの引用か。とても良い。「昔のしらべを 今にかえし」→「昔の歌を今のこととして歌おう」
- 168 番「ノエル ノエル」—「まみえた」日常では使用していない表現。
- 175 番「かいばおけで」—子どもの歌というイメージがあるが、英語でも「Thee」などの古語が含まれている。文語体の訳になっているが、『讃美歌 21』（269 番）のように子どもに理解しやすい訳が良いのではないか。
- 188 番「主にあるものみなほめたたえよ」—元は子どもの歌だが、訳詞が子どもには難しい。
- 192 番「みたりの博士は」「みたり」→「三人」の意。
- 194 番「まぶねの傍に」—「かたえ」は『讃美歌』1954 年版からの表現。日常的には使わない言葉だが、この曲の象徴的なものとして残していくべきか？「傍」は漢字表記になり理解しやすくなった。<sup>かたえ</sup>
- 198 番「きよき調べ空に聞こえ」文語が基調となっており、毎節「君」の表現がある。
- 200 番「もろびとこぞりて」—「捕虜(とりこ)」は、ルカ 4 章、イザヤ書の「捕らわれている人に解放を与え」などからきているのだろう。「きませり」来たのか、これから来るのか、曖昧に理解されているのではないだろうか。英語では「comes」となっており、単に過去に来たというだけでなく、「今、来られる」という臨場感や、希望を含むものであり、時制に囚われない表現といえよう。文法的には「り（完了形）」で「来られた」の意。
- ※「悪魔」は原詩にもあるが、現代においてどう理解していくのかは課題である。3 節「光の君」4 節「平和の君」「君」天皇を連想する。日本基督教団出版局の訳詞なので、変更する場合は、新たに訳し直すことになるだろう。

### <「文語調」「口語調」「古語」に関する所見>

文語調、古い言葉には日本語ならではの「味わい深さ」「美しさ」があるが、賛美として言葉の意味を理解していくためには注釈が必要とされる場合がある。文語体の意味を調べて理解することで逆に世界が広がることもある一方で、歌う中で新来者や外国籍の方々、子どもたちに理解されることも大切にしていきたいと願う。子どものための賛美歌が、文語調で訳されているものも多々散見された。「…まつる」「…たまえ」などでは、口語訳を今後試みることを申し送りたい。

ある外国籍の方から「いつくしみ深き」の訳詞「深き」は、文語調であるため理解に戸惑ったと聞いた。「外国籍の方にもわかりやすい言葉」という視点をもったの編纂があるだろう。『讃美歌 21』では、文語体の口語体改訳を試みられていることに敬意をもっているが、日本語の表現や音の美しさが損なわれてしまったとの声も聞いている。口語・文語の文体の選びとりでは、賛美歌集がどのような目的に立って編纂されるかが問われることであろう。

## B. 天皇制用語、神道用語とされることばの使用

天皇制用語、神道用語の課題については「賛美歌検討委員会議 中間報告書」（2015）の P. 14 以降に記されたとおりである。今回 101 番～200 番までの評価に際し、特に「み霊」「み座」「君」の使用状況と使

用傾向をまとめた。

### <み霊>

119番「父なるみ神はいとつよきみ神」 3節「聖なるみ霊は世の荒波をも」

125番「造られしものよ」 4節「父み子み霊の ひとりのみ神を」

137番「うみべの野で」 4節「送りとまえみ霊を」

167番「天にはさかえ」 2節「み霊によりて おとめにやどり」

※『讃美歌』（日本キリスト教団出版局）98番2節「いやしきしずの」を「み霊によりて」に読み替え推奨がおこなわれているため、その詩を採用。ただし「み霊」のことばの使用に関しては課題はある。

### <み座>

146番「み栄とみ座を去り」 1節「み栄とみ座を去り世に来られたみ子」

147「ハレルヤ イエス君」 1節「聞かずや歌声 み座に響く」

148番「久しく待ちにし」 2節「さかえのみ座に 引き上げたまえ」

※2節「さかえのみ座（みくら）に 引き上げたまえ」の「みくら」という用語も課題であるが、高いところに特別な席があるという表現には違和感がある。原詞に近づけるなら、「さかえのみもとに 引き上げたまえ」とすると、「イエスさまが座る王座のそばに引き上げてください」ということになるのではないか。

167番「天にはさかえ」 2節「神のみ座を はなれて降り」

※高貴な高いところという理解もあるが、イエス・キリストには、信仰の表現として「私のところに来てくださった友としてのイエス」というイメージもある。イエスは「王」、「君主」、「友」等、様々に表されるが、賛美歌として今この時代にどのように表現したらよいのかは、宣教論の見地から検討すべき課題であろう。

188番「主にあるものみなほめたたえよ」2節「み座より来たりて まぶねに伏す」

### <君>

138番「主イエスは今日も」 3節「よみがえられた イエス君を」

141番「イエス君 ハレルヤ」 全節「イエス君 ハレルヤ」

143番「世に告げよ」 1節「イエス君こそ 勝利の主」

147番「ハレルヤ イエス君」 1節、3節「ハレルヤ イエス君」

160番「天なる神には」 4節「主イエスをわれらの 君とあがめ」

167番「天にはさかえ」 全節「今ぞ生まれし 君をたたえよ」

171番「ダビデの村里」 2節「ちいさきまぶね 君のゆりかご」

175番「かいばおけで」 3節「愛しまつる イエス君よ」

181番「凍てつく風の真冬の日」 3節「み使い拝す 君なれば」

183番「優しきマリア」 1節「まことに君は 救い主と」

- 184番「マリアより生まれたもう」 1節「救い主 イエス君」  
185番「雪ふる冬に愛の小羊」 2節「高き所に いましし君の」  
192番「みたりの博士は」 2節「黄金持ちきて 君に捧ぐ」  
196番「救い主をほめたたえよ」 3節「力に満つ とこしえの君」  
198番「きよき調べ 空に聞こえ」 1節「馬ぶねの君を ほめまつる」  
200番「もろびとこぞりて」 3節「光の君なる」4節「平和の君なる」

### <天皇制用語、神道用語とされることばの使用に関する所見>

語句の使用状況は、「み霊」が4曲、「み座」が5曲、「君」が16曲であった。使用傾向については、「み霊」は「聖霊」の意味で使用されるが、「み座」は特にクリスマスの曲のなかで、神の子キリストが、人として世に生まれたことを表現するところで使用される傾向がある。また「君」はクリスマスの曲における使用頻度が高く、世に生まれた神の子を表現するための短い言葉として、使用されやすいようにも思われる。「用語」の問題とともに、クリスマスの賛美歌に関する神学と表現方法を深めていく必要性も感じている。

### C. 課題となっている言葉

部落問題特別委員会による指摘（『新生讃美歌ブックレット』 p27）により、賛美歌の中にある「けがれ」という言葉を検証した。また、2003年版『新生讃美歌』編纂時に度々とりあげられた「きよめ」についても、その神学と信徒の理解について考察した。以下、101番～200番までの「けがれ」「きよめ」の使用について記す。

#### <けがれ>

129番「神のことば」 1節「罪とけがれに 染みし身を」

・「けがれ」 「新生讃美歌アンケート」（2016）の部落問題特別委員会の回答、賛美歌の中の「けがれ」という言葉によって痛みを覚えている方々がいることの指摘があった。『新生讃美歌ブックレット』（2018）P38では、ことばの歌い替えを提案している。

#### <きよめ>

173番「ああベツレヘムよ」

- ・『新生讃美歌』3節「罪ふかき世に かかる恵み」は『讃美歌21』267番の3節では「心低くし 主を迎えよ」と訳されているのは参考にしたい。『讃美歌21』の訳の方が原詩のニュアンスがより表されており、かつ日本語としてもわかりやすい。
- ・4節「心をきよめ宮となして」の原詞は cast out our sin and enter in にあたるが、cast out our sin の直訳は「罪を捨てる」であり、「きよめ」の訳詞には解釈が入っている。

「きよめ」は日々変えられ、キリストのようにせられ、「聖く」されることをいうが、バプテスタの教会では、賛美歌内の「きよめ」の言葉を「新生」と置き換えて理解して歌っているのではないか。

『新生讃美歌Ⅰ』『新生讃美歌Ⅱ』の1/3は『リヴァイヴァル聖歌』から採用されており、それらの讃美歌の神学に大きく影響を受けていることが考えられる。『リヴァイヴァル聖歌』を編纂した中田羽後が属するホーリネス派では「聖化」を重んじていて、讃美歌集によっては「聖化」が項目に挙げられているものもある。『新生讃美歌』には「きよい」が多々用いられており、どのように理解され、歌われているかは、さらなる検証が必要である。

## V 子ども

子どものために（子どもにより）作られた讃美歌から挙げられた課題と評価を以下記す。

### 127番「天の光 主の光」

米国では20世紀半ばから親しまれている讃美歌で、夕礼拝などで楽しく賛美する短い讃美歌として知られる。513番の一部がモチーフとされている。日本語では冒頭の「天の光」、音に対して言葉の訳詞が不自然で歌にくい面も指摘された。『ふくいんこどもさんびか』（1965）に収録され、こどものさんびかとして親しまれてきた讃美歌でもある。

### 133番「聖きみことば」

子どものための讃美歌だが、文語調になっているのは残念である。改訂する場合は子ども向けに訳し直しても良いのではないか。

### 139番「イエス様を信じましょう」

作者が6歳の子どもの時に書いた讃美歌であるため曲も詞も変更は難しい。子どもが書いた讃美歌として採り上げられ収録された経緯がある。教会学校で子どもたちと曲を作る際の参考となるのではないか。「子ども讃美歌」というジャンルの項目があればそのまま残せるが、『新生讃美歌』（2003）は用途を限定しないためにあえて項目分けをしなかったことから、子どもの歌としての選曲が難しくなっている。「こども」の項目別にしないと埋もれてしまい歌われないのではないか。3節の「みくに」は、子どもの中で使用されている言葉かは疑問である。解説が必要ではないか。

### 172番「王様が生まれた日」

「宿屋」という言葉は原歌詞にはなく「村（village）」と訳したほうがよい。言い換える場合、「小さな村ベツレヘム 御子は生まれた」などが考えられる。幼稚園児を対象としたため、イメージしやすいことばで訳されたことが推察される。訳語「赤ちゃん」は、讃美歌としては特徴ある響きがあるが、原詞では「Child」であり「baby」ではない。この讃美歌では「Child」に「C」の大文字が当てられており「御子」を意味する言葉である。（※「御子」の言葉の取り扱いが天皇制用語とも理解される場合があり検討の余地がある。）視聴覚的にも想像を駆り立てて、ドラマチックなメロディーが各節後半で繰り返されており、2節は「貧しく小さい、けれども救いの道を開かれた」という流れを経て、繰り返し部分が歌われていく。

### 178番「子どもたちよ来てごらん」

子どものために作られたクリスマスの讃美歌。それまでのカトリック教会においては子どもが歌うことはなかったが、プロテスタントの礼拝改革には子どもと共に賛美することも含まれ、この歌は子どもにも賛美を教えることに用いられたと考えられる。打楽器や笛など色々な楽器で歌える楽しい賛美

歌。南部バプテストの賛美歌集“Baptist Hymnal”（1991）では4/4だが『新生讃美歌』の2/4の2拍子の方が良い。1節の「うま小屋」は、このままでも良いが、当時ベツレヘムには馬はいなかったということも考えると変更の余地あり。

### <子どもに関する所見>

127番等の短い賛美歌は英語圏の礼拝ではよく歌われ、子どもに限らず、礼拝の冒頭や最後などに全会衆が気持ちを一つにするために用いられている。会衆も曲を覚えているので、突然歌い出してもすぐに入れる。127番は『新生讃美歌Ⅰ』で収録されていた曲であり、この歌集で慣れ親しんできた人には歌いやすいかもしれないが、初めて歌う人には、訳詞の歌いにくさもありあまり歌われていないのではないか。133番は子どものために作られた賛美歌なので「子ども」と分類されているが、詞が文語調に訳されたということもあり「子ども向け」とはなっていない。139番は対照的に子どもが作った賛美歌なので、子どもには歌い易いだろう。「みくに」はこどもの言葉として実際に用いられているかは検証が必要である。178番はクリスマスの定番賛美歌で、多くの教会で用いられている。2拍子も行進曲のようで、子どもたちにも馴染みやすい。

## Ⅵ クリスマスの賛美歌

目次では、Ⅱ神の働き、イエス・キリスト、待降の148番から降誕の204番までとなり、全57曲がクリスマスの曲である。『新生讃美歌』682曲のうち57曲（総曲中8パーセント）と、多数の曲が収録された。『讃美歌21』では、待降・再臨・アドヴェント228番～公現279番52曲で、580曲の中9パーセント、『教会福音讃美歌』（いのちのことば社、2012）では506曲中40曲の8パーセントであり、クリスマスの曲の賛美歌集における割合は同程度である。『新生讃美歌』（1989）では12曲とクリスマスの賛美歌数が限られていたため、2003年版では多く収録することを意識して選曲にあたった。これまで、総曲数の中のクリスマス曲数の割合が大きいという印象を持っていたが、上記の他派の歌集との比較から考えると、平均的割合といえる。クリスマスには、長い歴史や文化を経て、たくさんの曲が作られ、歌われてきたことが背景にあると考えられる。以下、項目ごとに、課題を挙げる。

### A. 訳詞

149番「来れやインマヌエル（A）」、150番「来れやインマヌエル（B）」

「エッサイ」、「アドナイ」が、歌詞がメロディー譜の下にないために歌いにくい。

186番「牧人ひつじを」

「ノエルを伝えた」「ノエル ノエル」とノエルが繰り返し歌われるが、意味がわからないで歌っている場合が多いのではないかと。

クリスマスは新来者が礼拝に参加する機会が多く、歌いやすく理解できる歌詞が望まれる。また、慣れ親しんだものにとっても、賛美歌の訳詞が変更されたことで、歌いにくい部分があるものが散見された（149番、150番、186番）。一方で、157番「来れ 友よ 喜びもて」のように改訳されても馴染んで歌

われるものもある。少し歌いにくい部分もあっても総じて歌い易く訳されているため、それまでの訳詞をも超えて親しまれる場合もある。

## B. 日本バプテスト連盟 オリジナル讃美歌

166 番「いと高きところには」

176 番「主は豊かであったのに」

179 番「暗き夜に」

180 番「イエスがここに」

195 番「待ちわびし日」

日本バプテスト連盟の教会信徒による作詞、作曲が5曲採用された（ⅢC参照）。教会のクリスマスの礼拝や集会のために作られたもので、創作讃美歌が諸教会で奨励され、『新生讃美歌』を通して、分かち合われていることは、評価されるべきことである。

## C. 各国の讃美歌

定番のクリスマス讃美歌に加えて、新しい讃美歌、コラール、古典等、多岐に亘る各国の讃美歌が新しく加えられ、クリスマス礼拝の讃美がさらに豊かにされた。

152 番「あがめます主よ」インドネシア

156 番「いざ来りませ」コラール（ルター）

182 番「天より降りて」コラール（ルター）

194 番「まぶねの傍に」コラール（ポール・ゲルハルト）

158 番「静かに小舟きたる」ドイツ語

159 番「ようこそ来ませり」アイルランド

168 番「ノエルノエル」フランス キャロル

172 番「王さまが生まれた日」アメリカ

196 番「救い主をほめたたえよ」アメリカ

155 番「世のならぬさきに」ラテン語

187 番「いざ歌いまつれ」ラテン語

・以下は前編集委員の古澤嘉生氏により合唱曲として訳された英国讃美歌が提供された曲である。

159 番「ようこそ来ませり」、169「羊飼いたちが野宿の夜（A）」、170「羊飼いたちが野宿の夜（B）」、171 番「ダビデの村里」、174 番「ベツレヘムの町」、181 番「凍てつく風の真冬の日」、185 番「雪ふる冬に愛の小羊」、189 番「羊飼いたちはみ使いらの歌」、192 番「みたりの博士は」、193 番「人みな喜び歌い祝え」

・これまでの『新生讃美歌』には、ドイツ語の讃美歌の収録曲数が少なかったが、編集委員や分科会（選曲作業チーム）委員にドイツ語圏での讃美歌を経験された方々が多くおられたことから、コラールが多数紹介され採用された。『新生讃美歌』はアメリカの19世紀後半、20世紀初頭の福音唱歌を中心にはじめ編纂された経緯があるが、今回2003年版で、多数のコラールが入ったことは画期的なことである。

#### D. 歌詞の課題から

- ・羊飼、博士、マリヤ等、1曲の中でクリスマス物語が網羅される讃美歌が多い（186番、189番、190番）。他方、184番は「マリア」とはじまるが、1節から「十字架負い」2節では「主の血にてあがなわる」の贖罪のメッセージが歌われている。タイトル「マリアより生まれたもう」から選曲する場合が考えられる。タイトルによって選曲が限定されてしまう傾向があるだろう。
- ・「イエス君」、「平和の君なる」、など、讃美歌では歌われる文言だが、日常歌われていない言葉であり、また天皇制用語とも解釈されるものであるため新訳を試みられたい。同様に、148番「栄えのみくら」167番「神のみ座を」など、神の子がこの世に降られたことを表す用語ともなっている。歌い替えを検討できるとよい。

#### まとめとして

101番～200番までの100曲の曲評価では、前報告に続き、讃美歌の遺産から、讃美歌の歴史、神学、礼拝の讃美歌、伝道の歌、バプテストの讃美歌の伝統（英国、日本、日本バプテスト連盟）等、多くを学ぶ機会となった。加えて、讃美歌検討委員会議が取り組んできた「讃美歌のことば」の課題、文語調、天皇制用語、差別的用語では具体的な例をもって検証することができた。

この100曲内の特徴ともなっているクリスマスの曲数の充実は、『新生讃美歌』1989年版でクリスマスの曲数の絶対数が足りないことから意識的に選曲されたことによる。多くの古典のクリスマス讃美歌や、日本バプテスト連盟オリジナル曲を含む現代の新しい曲が加えられ、諸教会のクリスマスの賛美が豊かにされたことは、大いに評価されるべきことである。

今回の100曲においても「讃美歌の検証」を通してたくさんの気づきが与えられた。各教会でも讃美歌の検証や学びをお勧めしたいが、この作業は時間的、資料収集の点で各個教会が取り組むには難しい面があり、連盟内では一教会の報告がなされているのみである。この働きこそ「協力伝道」として担うべき尊い取り組みではないだろうか。2021年度からは協力委員をたて、5つのチーム（総勢16名）により、全国の地方教会の信徒がオンラインを介して評価作業が進められている。歌詞、曲について吟味し評価する学びあいはあらたな経験となり、日頃歌っている讃美歌がより親しく感じられ、意識をもって讃美歌に臨むことができるようになったとチームメンバーより報告を受けている。

『新生讃美歌』のはじめは、日本基督教団出版局発行『讃美歌』（1954）は「偏っている」として開始した歌集編纂であり、最初は伝道集会用として出版したものであったが、その後も発行を重ねるごとに、日本バプテスト連盟の推進の中身が歌集に表わされてきた。1989年版に礼拝讃美歌が足りなかったことの反省から、2003年版では「礼拝の讃美歌」の充実を求めて、総合的な讃美歌集を目指して編纂された。歌集発刊以来、収録された讃美歌を用いつつ各個教会は礼拝を形成し、「礼拝とは」「私たちの賛美とは何か」を互いに学びあってきたのである。2003年版では『新生讃美歌』の「曲数の充実」という一つの目標は達成したが、今度はその内実である「讃美歌と宣教」「会衆賛美の会衆とは誰か？」が問われてきている。そして、この検証を通して、「このような言葉で歌いたい」「このような視点の讃美歌を歌いたい」など、新しい讃美歌への希求が起こされている。この歌集編纂の歴史を創出くださった先達に感謝しつつ、この讃美歌を通しての学びあいをこれからも続けていき、さらに、現代にある教会、宣教に呼応した

讃美歌を求め、捧げていきたいと願う。

讃美歌集は、一度出版されたら、それを永久に使用していくというものではない。時代にあって、ふさわしい「ことば」をもって主を讃美していくために、使用を通して「新生されていく」ことは信仰において必須である。『新生讃美歌』2003年発刊から、来年で20年を迎えようとしている。今度はどのような新しい歌を選びとっていくだろうか。今後も検証と学びあいを継続し、新しい歌をさらに加えていくための推進に取り組んでいきたい。

讃美歌検討委員会議名簿 ※所属教会は当時のもの

<2016年度>

伊藤園子（目白ヶ丘）  
坂本献（所沢）  
中田義直（市川大野）

<2017年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）

<2018年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）

<2019年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）  
内藤幹子（目白ヶ丘）

<2020年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）  
内藤幹子（目白ヶ丘）  
藤井秀一（花小金井）

<2021年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）  
内藤幹子（目白ヶ丘）  
藤井秀一（花小金井）  
協力委員 武章子（上尾）  
麦野達一（福岡西部）

<2022年度>

伊藤真知子（百合丘）  
坂本献（所沢）  
内藤幹子（目白ヶ丘）  
藤井秀一（花小金井）  
協力委員 武章子（上尾）  
麦野達一（福岡西部）